

保育者養成における立体表現指導の一考察 題材「身につけて楽しむ造形」がもたらす 学生の素材理解と表現方法の獲得について

田 中 美 貴

A Study of Teaching Three-Dimensional Expression in the Training
of Nursery School Teachers:
The material understanding and acquisition of expression methods of students
by the teaching material “Wearable and Enjoyable Formative Arts”

Miki TANAKA

【要 旨】

本研究は、保育者養成における学生の造形活動に対する苦手意識や立体造形力の現状を把握し、学生アンケートの調査結果をもとに、題材「身につけて楽しむ造形」によって学生が獲得した造形表現技術の一端を示したものである。本題材を使った授業では、さまざまな素材や表現技法を織り込みながら、完成した作品を学生自身が身につけ、それを写真に撮影することで、学生同士が楽しみながら作品を認め合う環境を設定することができた。一人一人の学生が作品と向き合い、素材に対する理解や表現方法の獲得を促すことだけでなく、学生にとって身近な写真を使って共有することで、作品への愛着や達成感、自信につながり、本題材が学生の造形表現に対する苦手意識を軽減し、保育に必要とされる自己肯定感や表現力の獲得にも有効であることが明らかとなった。

【キーワード】

造形表現、立体表現、素材理解、幼児と表現、造形表現における学生の苦手意識

1. はじめに

平成30年3月発行『幼稚園教育要領解説』¹⁾の感性と表現に関する領域「表現」において、「ねらい」の解説には「それぞれの素材や表現の手段の特性を生かした方法で表現できるようにすること、(中略)また、自分の気持ちを一

番適切に表現する方法を選ぶことができるように、様々な表現の素材や方法を経験させることも大切である。」とある。これらを叶えるためには、保育者自身が多彩な表現方法や素材について経験していることが前提である。

果たして学生自身がどこまで獲得してきているのだろうか。学生の現状を知り、領域「表現」に関わる保育者として必要な内容を整理する必

要があると考えた。

造形関係の授業を通して学生と関わってきた中で、特に立体的に考えるものの見方、立体造形、空間構成に関する想像力の弱さが懸念される場面が多くあった。彼らは手を動かしながら試行錯誤するものの「作りたいけどどうしてよいかわからない」状況で悩んでいるようだった。

高等学校教育までの図画工作、美術科における題材は、学習指導要領に基づき指導計画を立てるものの、題材の細かな内容設定は担当者の専門性によるところが大きい。また、高等学校での芸術科目の選択制により、中学卒業後、全く美術に触れていないという学生もいる。知識や技術というより、日常生活における生活技術経験の少なさから、作ろうとする立体の制作過程をイメージすることや、作りたい形を形成する術を想像することに困難さを感じていることも考えられる。

学生は卒業後、保育や教育に関わる者として、子どもたちの造形表現活動の援助だけでなく、子どもの主体的な活動を促す環境構成の整備やそれらに関わるものを生み出す技術や能力、アイデアが必要とされる。一例としては、子どもの作品の展示や見せ方、劇遊びの大道具や、子どもの遊びや表現活動を発展させるための立体物を制作する方法などである。

筆者は、保育者養成のカリキュラムの中で、学生が楽しみながら造形力・表現力を養うにはどのような題材が適しているのか、限られた時間数の中で、特に立体感覚・立体造形力を伸ばす手立てはないかと研究を続けてきた。本研究は「身につけて楽しむ造形」を題材として、保育者養成における学生の造形活動に対する苦手意識や立体造形力の現状を把握し、授業後アンケートの考察をもとに、学生が獲得すべき造形表現技術の一端を明らかにしていく。

2. 学生状況

研究対象は2022年度入学の初等教育科1年生で、2022年度後期「幼児と表現」を受講する2クラスの学生、計81名である。学生の状況とし

ては入学して半年が経ち、学生生活にも慣れてきた頃である。教育実習や保育実習が始まり、保育士、幼稚園教諭、および小学校教員の夢に向かって学ぶべき内容や目指す方向性が具体化し、現実味を帯びてくる頃でもある。領域・表現に関連する内容としては、クラスによって担当者は違うものの、前期中に「保育内容V」の授業で音楽表現や造形表現に触れている。

「表現」に関わる専門的な技術や知識、表現力が、将来の仕事に必要であると感じながらも、苦手意識をもっている学生が一定数存在することは、他の養成校でも多くの事例が挙げられている。本研究対象の学生81名に実施した以下のアンケート結果(図1)からは、全体の46%が苦手意識をもっていることが明らかとなった。

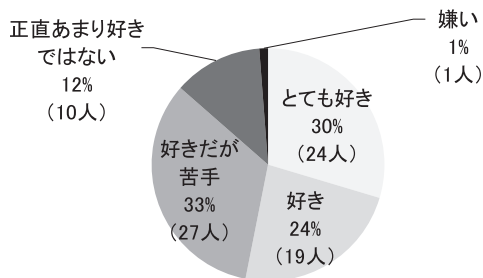


図1 あなたは造形活動が好きですか。

造形活動が「とても好き」「好き」「好きだが苦手」と回答した学生を合計すると、造形活動を「好き」だと回答した学生は、全体の78%であり、8割近くの学生は造形活動が好きだと感じており、意欲的に臨んでいることがわかった。しかし、33%の学生が「好きだが苦手」と回答しており、好きではあるが自分の造形力や表現力に自信がもてないことが示唆される。また、13%の学生が「正直あまり好きではない」「嫌い」と答えている。

図2は造形活動の中で、平面表現と立体表現のどちらが好きであるかの回答を示したグラフである。平面表現である「絵を描くこと」の方が好きであると回答した学生は「どちらかといえば絵を描くこと」と回答した学生を含めると全体の40%となった。「立体のものを作ること」

が好きであると回答した学生の割合は「どちらかといえば立体のものを作ること」と回答した学生を含めると全体の60%となった。立体の方が好きであると回答した学生の中には「絵を描くことは苦手」「絵を描くことより手を動かしていればなんとか形ができるイメージがあるから」など、絵を描くことに対する苦手意識から「立体の方がまだ良い」とネガティブに捉える理由も多く、造形表現が楽しい、得意だ、と感じられない学生にとって、立体表現は平面表現よりもハードルは低く、取り掛かりやすいことがわかった。

筆者は常々「学生は立体表現に関する経験が少ないのではないか」と感じていたが、このアンケート結果によりそれが明らかとなった。図3が示すように、今まで経験してきた作品は

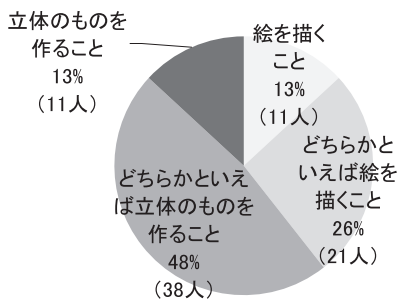


図2 絵を描くことと、立体のものを作ること、選ぶとすればどちらが好きですか。

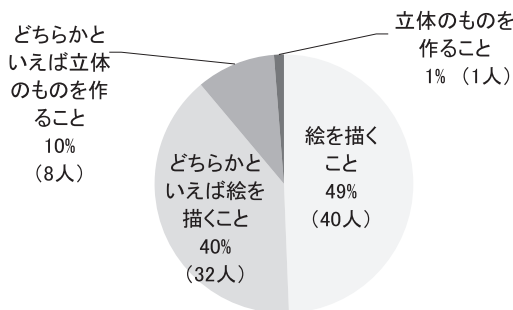


図3 あなたが小学校から高校までに図画工作や美術で経験してきたさまざまな課題の中で、「絵画」と「立体造形(工作)」どちらの課題が多かったと感じますか。

「どちらかといえば絵画の方が多かった」と回答した学生を含めると「絵画の方が多かった」と回答した学生は89%、全体の約9割となった。もちろん、本学一部の学生の経験、感覚的なものの結果であり、今後も調査を継続していく必要があるが、この結果は多くの学生が「立体作品を作ってきた経験、記憶が少ない」ことを示している。図2、図3から、学生は立体を作る方が好きではあるが、実際には今まで絵を描くことが多かったということが示された。以上の状況を踏まえて、考察していく。

3. 題材「身につけて楽しむ造形」について

保育における造形活動において「身につけて楽しむ造形」から連想されることは、身体に装着するようなファッションに関わる立体造形、服や帽子、マント、靴、時計やアクセサリなどが挙げられる。行事の衣装、ごっこ遊びなど様々な活動の中で「身につけて楽しむ造形」が保育に取り入れられている。その際、子ども自身が作る場合と、保育者が作り保育教材として使用する場合がある。どちらも、立体造形に関する知識と経験が求められる。筆者は授業の題材選択において、身近に存在するものが素材と成りうる視点をもたせること、限られた時間の中で素材理解を促し、達成感や自己肯定感と共に表現方法を獲得させていくことを肝要としている。今まで取り組んできた立体造形に関する題材の中から、それらを多面的に網羅していると思われるものを選択した。かつ、学生の意欲や満足感が高かったもの、他学年や卒業生からも「こんな作品を作りたい」「こんな知識や技術が欲しい」という声があり、学生の興味関心が高かったことから、この題材を取り上げ研究対象とした。

4. この題材で学生に獲得してほしい具体的内容

- (1) 立体造形、工作素材としての紙の可能性を知る。

造形紙としてはケント紙や方眼紙などが一般

的であるが、それらの素材も紹介しながら、今回は手に入りやすい描画用の厚手画用紙を使用した。身近にある画用紙でどのような立体造形が可能なのか、「描く」だけではない画用紙の多面性を知ることが目的とした。平面的な画用紙を帯状に切り取り接合していくことで、立体的な造形物になることを体感させる。

(2) 紙の切断方法を知る。

紙を切断する代表的な道具として、保育・教育の場では、ハサミとカッターが挙げられる。保育現場ではハサミが使われることが多いが、教材準備や行事準備等でカッターを使いこなすことができれば、造形表現活動だけでなく、様々な場面で作業効率を上げることができる道具でもある。これまで筆者が担当した学生の多くはカッターを使用した経験が少なく、カッターという道具に対して「怖い」「うまく切れない」「ガタガタになる」等のイメージを持っていた。刃の出し方や固定の方法、状況に適した刃の長さの判断、切れが悪くなった時は刃を折って新しい刃に整える等の知識や経験がなく、一部の学生は刃がどちらについているのかもわからないまま、初めて使うかのような反応を見せる。今回は画用紙を帯状に切り取る工程があり、最初に使用する前に改めてカッターの使い方を説明する。実際に目の前でデモンストレーションを行い、カッター使用時の注意点や安全性、直線に切ることができるポイントについて具体的に伝える。

(3) 紙の接着・接合の方法を知る。

紙の接着には主にのり、セロハンテープ、両面テープ、ホッチキス等がある。今回は、骨組みとなる画用紙を組み立てる工程ではホッチキスを、色画用紙を貼り付け張り子のように成形する工程では、水で溶いたボンド液を使用する。デモンストレーション時に、素材によって接着・接合する道具の特長を理解して選択することを伝えながら、ボンドの特性と使用方法について説明する。使用する接着剤は、ホームセンターで手に入る木工用ボンドを使用した。ク

ラス単位で1kgの袋ボンドを準備し、1人1つ発泡スチロールの井容器に取り分ける。木工用ボンドもさまざまな種類とサイズが展開されており、袋ボンドを見た学生はここでその存在を「知る」ことができる。保育においてさまざまな素材を準備し、環境を整えるには、どのようなものがどこで手に入るのかを知ることも大切である。その経験が在学時から積み重なっていくよう配慮したい。井容器の中でボンドと水を1:1で混ぜ合わせ、そこに色画用紙を浸すようにして支持体(画用紙の骨組み)に貼り付けていく。ボンドは水に溶いても紙に対する接着力があり、白色から透明に変化し、プラスチックのように硬化することを体験させる。

(4) 配色の工夫について知る。既成概念にとられない配色を楽しむ。

着色には折り紙ではなく色画用紙を選択した。理由としては、ボンド液使用時にもある程度の張りを保つことができ、立体的な支持体(画用紙の骨組み)に容易に貼り付けることができるからである。折り紙を使用した場合、ボンド液で貼り付ける際に、その薄さから一部の学生が困難さを感じることを考えられた。できるだけ素材に対する扱いにくさや失敗感をもたずに仕上げられるよう配慮した。白紙のコピー紙や白画用紙に絵の具で着色することも考えられたが、自由に着色できる反面、単色での塗りつぶしや、苦手意識のある学生にみられる「白紙に描く」という抵抗感や緊張感が懸念された。全20数色という制限のある中で色の組み合わせを楽しむことや、配色による視覚的効果に気づく機会を設定したく、色画用紙を選択した。モザイクのように3~4色の色画用紙を混ぜて貼ることにより、色による奥行き、変化や面白さを感じさせ、「(動物の)クマは茶色」等の固定概念を崩し、表現は自由であることを体感させたい。クマを茶色で作るとしても単色ではなく、茶色にも焦茶や薄茶などさまざまなトーンやグラデーションがあること、その組み合わせ次第で変化に富んだ表現ができることを目指した。

(5) 作品を完成させ、身につけることで得られる作品に対する愛着、達成感を体験する。

本題材は手順や作業そのものは単純であり、失敗が少なく、配色も一人一人の独自性を表現することができる。また、ボンドを使用することでプラスチックのような仕上がりとなり、想像以上の完成度、満足感が得られやすいのではないかと考えた。作品完成後には鑑賞発表会を行う。さらに、スマートフォンを利用して自分の作品を身につけて撮影を行う。コロナ禍においてICT化が急速に進む中、学生たちはスマートフォンで気軽に写真を撮り、SNS等で日常的に楽しんでいる。作品を身につけて写真を撮り共有することで、自分や他者の作品を鑑賞し、味わう方法を提案した。頭に身につけられる造形として完成させることで、作品に対する愛着や達成感を得られるようにする。

5. 研究方法

令和4年度(2022年度)初等教育科1年生2クラス計81名を対象に、「幼児と表現」の授業において、教材「身につけて楽しむ造形—どうぶつのぼうし—」の授業を実施した。授業の目的やこの教材で学生に獲得してほしい具体的な知識や技術、表現方法は3. 4. で示した通りである。授業実施時期は2022年度後期10月「幼児と表現」3コマ(90分×3回)、鑑賞会を含めると3.5コマとする。授業後に学習管理システム Moodle を使用したアンケートを実施する。アンケートをもとに、学生が立体造形における制作過程において、どのような部分に苦手意識をもっているのか、素材や道具に対する理解度はどのように深まっていったのか、立体表現方法をどう獲得していったのか、アンケートをもとに考察していく。

以下に、授業の流れを示す。

- ①前週授業において、次回のテーマと授業目標を知る。授業までに作りたいものを考えてくる。
- ②作りたい「どうぶつ」を選び、イメージを膨

らませアイデアスケッチとして描き起こす。
※「どうぶつ」は哺乳類に限らず、魚類や爬虫類、自分で考えた想像上の生き物も可と伝える。

- ③画用紙を使った立体の作り方の一例について、授業者のデモンストレーションを見る。カッターと、ホッチキスの適切な使い方を復習する。
- ④デモンストレーションを参考に、自分の作りたい形に合わせて、画用紙の帯をホッチキスで接合し、組み立てていく(図4、図5)。
- ⑤配色を考え、好きな色の色画用紙を手でちぎって、3×6cm程度の大きさに適量準備する。
- ⑥ボンドを水で溶きボンド液を作る。ボンド液に色画用紙を浸し、骨組みに貼り付けていく(図6)。
- ⑦目や鼻など細部を仕上げる。
- ⑧乾燥させ、完成(図7)。
- ⑨鑑賞会を実施し、撮影や意見交換を行う。
- ⑩Moodle を使って、振り返り・アンケートを記入する。



図4 ホッチキスで組み立てる

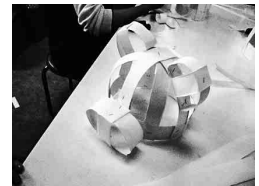


図5 制作途中の骨組み



図6 ボンド液で貼る



図7 完成作品

6. アンケートの結果と考察

授業実施後(作品完成後)に行った学生アンケートの項目(1)～(5)に沿って、結果を分析、考察していく。

(1) ①この課題で一番楽しいと感じた工程は、どの部分ですか。具体的にはどのような部分が楽しいと感じましたか。

(n=81)

工程	人数	割合
作りたいものを考え、アイデアスケッチをする	4	4.9%
画用紙を切って骨組みを作る	19	23.4%
配色を考える	19	23.4%
ボンド液で色画用紙を貼り付ける	34	42.0%
目や鼻などを装飾して仕上げる	5	6.2%
その他	0	0%

図8 この課題で一番楽しいと感じた工程は、どの部分ですか。

ここでは割合が高かった「ボンド液で色画用紙を貼り付ける」工程と、「画用紙を切って骨組みを作る」工程について中心に取り上げ、考察する。「ボンド液で色画用紙を貼り付ける」工程が楽しいと感じた学生は全体の42.0%で、最も多い割合であった(図8)。理由としては、「自分で画用紙をちぎって好きなように貼り付けるところ。」「何も考えずに貼っていくところ。思い通りに貼れないこともあるが、ランダムに貼っていくことが楽しい。」「ペタペタ貼っていい感じにできるのが面白く、楽しかった。」「ちぎって貼っての作業がとても楽しかった。」など、高度な技術を要することなく、自由に、無心に貼り付け形が見えてくる楽しさを感じた学生が多かった。

次に割合が高かった「画用紙を切って骨組みを作る」工程が楽しいと感じた学生は全体の23.4%で、理由としては「形ができていく感じが楽しかった。」「どんな形にするのか考えるのが楽しかった。」「画用紙を折るところ、まっすぐに切るところ。」「ホッチキスをあまり使うことがないので、ぱちぱちととめていくのが楽しかった。」「骨組みをホッチキスで留めるのが楽しかった。」などであった。作業量と比例して形が出来上がっていく感覚や、作りたい形を模索していく過程を楽しいと感じていたようである。ホッチキスを文具としてではなく、作品を作る道具として使用し、その手軽さと確実に接

合できる道具の特長を楽しんでいた。また、「配色を考える」工程も全体の23.4%が楽しいと感じており、理由は「自分の好きな色に配色して貼り付けるところ。」「どこにどの色をつけるのか考えながら貼るところ。」「ボンド液で貼りながら色の配色などを決めるのが楽しかった。」などで、2~4色の色画用紙を、全体のバランスを見ながら、思い通りの配色で貼り重ねていく工程を楽しいと感じたようである。

②この課題で一番難しいと感じた工程は、どの部分ですか。具体的にはどのような部分が難しいと感じましたか。

(n=81)

工程	人数	割合
作りたいものを考え、アイデアスケッチをする	3	3.7%
画用紙を切って骨組みを作る	24	29.6%
配色を考える	2	2.5%
ボンド液で色画用紙を貼り付ける	33	40.7%
目や鼻などを装飾して仕上げる	17	21.0%
その他	1	1.2%

図9 この課題で一番難しいと感じた工程は、どの部分ですか。

「ボンド液で色画用紙を貼り付ける」工程が難しいと感じた学生は全体の40.7%で、最も多い割合であった(図9)。理由としては、「骨組みが不安定な部分に貼り付けるのが難しかった。」「隙間を上手く埋めていくこと。」など、骨組みの隙間が多く、丁寧にできていなかった学生は、色画用紙を貼り付けていく工程に難しさを感じていることがわかった。他に、「ボンド液を付けるとふにゃふにゃになり、骨組みの形が変わってしまうので難しかった。」「色画用紙をしっかりとボンド液に浸さないで柔らかくならず形にフィットしないので、ボンドに浸す時間や使用配分が難しかった。」など、紙の特性(水分を含むと柔らかくなること)を掴めずに思い通りにいかない困難さを感じたようである。また、「配色を考えながら貼る作業をしていくのが難しかった。」など、配色を考えながら貼り付けていくということが楽しいと感じた

学生が多いと同時に、一つの作業の中で、二つの工程（配色と貼付）を進めることに困難さを感じる学生がいることがわかった。

次に割合が高かった工程としては「画用紙を切って骨組みを作る」が挙げられた。具体的には「どこに何をどうしたらどうなるか考えるのが難しい。」「自分の想像している形にするのが難しかった。」「大きさや形を考えながらホッチキス止めをするところが特に難しかった。」「骨組みをどのようにつけたら形が綺麗になるのか、色画用紙が貼りやすくなるのか考えながらすることが難しかった。」などが挙げられた。後に色画用紙を貼り付けることも考慮して、自分のイメージする形に成形するには、画用紙の帯をどのように接合していったら良いか、どの部分をホッチキスで接合していくのが効果的であるのか、曲面のある半球を成形することに苦慮した様子が伺える。

(1) ①②の項目についての考察としては以下の通りである。

学生は「貼る」「つなぐ」など無心になって集中できる工程を楽しんでいる。さらに、立体作品であることから、作業量に比例して形が目の前で出来上がっていくことで、完成へと近づいていくことが実感できたことが示唆される。貼り付けることや骨組みを作ることが難しいとした学生も、一つ一つ制作を進める中で、結果的にはその悩んだ過程が達成感につながっていったのだと考えられる。作りたいものを考え、アイデアスケッチをする工程、配色を考える工程に困難さを感じる学生は全体として少数であった。配色に関しては混色のポイントを伝えたり、「表現は自由であり、ピンクのクマがいてもよい」と具体的に提案したりしたことで、安心して配色を楽しめたのではないかと考えられる。また、着色に色画用紙を使用したことによって、絵の具のように色を作り出すのではなく、ある色をどのように組み合わせるか、ということに集中できたことがわかった。

(2) この課題で次に活かしたいところはどのようなところですか。

自由記述で数が多かったものを中心に、項目に分け考察する。

〈立体構造に関する気づき〉

- ・骨組みをしっかり作ったほうが、貼り付けやすいことがわかった。
- ・次回は骨組みをしっかり固定して作りたい。
- ・もう少し骨組みを隙間なく埋めておけば、強度が出ると思ったので、次回は骨組みを丁寧に作りたい。
- ・骨組みを綺麗な形にするとできあがりも綺麗になると分かった。

画用紙で作られた骨組みの強度に関する気づきが多くみられた。立体の組み立て方だけでなく、経験して初めてわかる構造的物理学的なことへの関心が高まったことがうかがえる。

〈道具の特長や技術に関する気づき〉

- ・カッターで切るときは半分に折って外側に切るようにするとうまくいくことがわかったので、次はもう少しきれいに切れるようにしたい。
- ・耳のところはL字に貼ると上手くいくことがわかった。
- ・貼る大きさを場所によって変えた方が貼りやすかったので次回は適当に破らずに大きさを考えながらしたい。
- ・画用紙は大きめにちぎったほうが貼りやすいし、細いところは先に小さくちぎっていたほうが細かく貼れるので、次回は作りたい大きさに合わせてちぎりたい。
- ・ボンドの割合を多くした方がより強くなることを知った。もっとそういった知識を身につけたい。
- ・ボンド液で貼る部分では水を少し減らせばベタベタになりすぎずに済むことが分かった。
- ・ボンドを水に溶かして貼ると、頑丈に、カチカチに仕上がるということがわかった。
- ・ボンドは置いた形で固まるので、しっかり形を整えてから乾かすことを学んだ。

道具に関しては、特にボンドの特性に関する気づきが多く挙げられた。ボンドは水に溶いても紙に対する接着力があり、プラスチックのように硬化することを初めて知った学生が多かった。また、この特性を知ることによって、他にはどのような道具や素材があり、どのような活用法があるのかなどが知りたいという感想もあり、知的欲求や成長意欲を高めることができたと考えられる。

(3) この課題で立体造形表現の技術や感覚が身に付いたと思いますか。具体的にはどのような立体造形表現の技術や感覚が身に付いたと思いますか。

(n=81)		
回答	人数	割合
そう思う	47	58.0%
どちらかといえばそう思う	34	42.0%
あまりそう思わない	0	0%
そう思わない	0	0%

図10 この課題で立体造形表現の技術や感覚が身に付いたと思いますか。

「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を含めた100%の学生が「この課題で立体表現の技術や感覚が身に付いた」と回答しており、おおむね学習効果を実感できているといえる。具体的には「画用紙から立体を作る方法が身についた。」「仕上りの形を想像する立体(3D)感覚が身についた。」「アイデアを考える力、発想力や構想力が身についた。」「ボンドの特性を知ることができ、使い方が身についた。」などが多く、立体表現以外に関することでは「配色の方法を学んだ。」と答えた学生が多かった。

(4) 作品完成後「頭にかぶる」「身につける」ことで得られた感情を教えてください。

自由記述で数が多かったものを中心に、項目に分け考察する。

〈身につけることで得られる達成感〉

・自分の作品を実際に被ってみて、やりがいを感じる事ができた。また、他の人と見せ合

う楽しさがあった。

- ・自分はずまく出来ずいやだったが、友達に褒めてもらう事で、作品を少し好きになった。他の人から見て、そんなふうに見えるんだな、と新たな発見もあり、みんなの前に出るのは恥ずかしかったけど、楽しかった。
- ・動物園の中にいる気持ちになりわくわくした。
- ・恥ずかしかったけど、他の人も被っていたので楽しい気持ちになれた。
- ・一から作ったものが形になり作った後でも楽しむことができ嬉しかった。
- ・作る時だけでなく、作ったあとも楽しさを味わえた。
- ・動物になりきって被ることができ、いろんな作品が見られて、とても楽しかった。
- ・自分で作ったものを身に付けることは楽しかった。小さい頃を思い出し、ワクワクした。

完成した作品を置いて飾るのではなく身につけることによって、楽しみながら互いに作品を鑑賞し、自然な形で意見交換することができていた。恥ずかしいという気持ちを持ちながらも、自分の作品への愛着や、作品を認めてもらったことで表現することへの自信をもち、達成感を得られたようである。

〈表現を通した自分や他者への気づき〉

- ・みんなそれぞれ作品を被ることにより、その世界観を味わえ、それぞれの個性や好きな色や性格などが少しわかった。私の作品も自分らしいなと改めて思った。
- ・被っている人に作品が似ていて面白かった。

選ぶモチーフや、多様な表現方法により、その人らしい捉え方や自由な表現があることに気づきが見られた。

〈自分の作品を身につけて写真を撮る楽しさ〉

- ・自分が作ったものをつけて前に出るのは恥ずかしかったが、写真を撮ったりするのが楽し

かった。

- ・あまり上手にできなかったが、友達と写真を撮り合えて楽しかった。

「写真を撮る」ことを含めた鑑賞方法は、学生にとって身近で親しみやすい共有方法であることがわかった。完成後「写真に撮りたい」「(SNS等で人に)見せたい」という気持ちから、そこに思いをもって作品を完成させたこともうかがえる。写真に記録し共有することは、学生自身の作品に興味をもたせる、一つの手法として有効であることがわかった。

- (5) あなたは保育者を目指す者として、立体造形技術をもっと高めたいと思いますか。

(n=81)		
回答	人数	割合
そう思う	52	64.1%
どちらかといえばそう思う	27	33.3%
あまりそう思わない	2	2.5%
そう思わない	0	0%

図11 あなたは保育者を目指す者として、立体造形技術をもっと高めたいと思いますか。

「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を含めた100%の学生が「保育者として立体造形技術をもっと高めたい」と回答した。立体造形表現において今後授業で体験してみたいこととしては、「もっといろいろな素材や方法で立体作品を作ってみたい。」「紙以外に、どんなもので立体作品を作ることが出来るのか知りたい。」「イメージしている形になるように作れるようになりたい。」「数をこなしたらもう少し上手くなると思うので色々な立体作品を作ってみたい。」「お家など、大きな立体のおもちゃを作ってみたい。」「どういう構造にすれば立体になるのか、崩れにくいのかなどが知りたい。」などであった。立体造形技術は保育士・幼稚園教諭として必要な学びであると認識しており、立体造形表現への学生の意欲や向上心が認められた。

倫理的配慮

学生には、アンケートの回答は評価に無関係であること、研究に使用すること、公開される情報により個人が特定されることはないことを事前に伝え、さらにアンケートシステム記入欄にも明記した。

7. 成果と課題

本稿冒頭で述べた通り、立体造形は取り組みやすいが、いざ素材に向かうとイメージをどう形にして良いかわからない、という学生の現状が明らかとなった。その理由の一つとして、高等学校までの図画工作や美術の授業において、「立体作品を作るよりも絵を描くことが多かった」と感じる学生が、対象学年においては圧倒的に多いことがわかった。この点については、母数がまだ少ないこともあり、今後も調査を続けていきたい。現実として造形表現に苦手意識を持っている学生は多く、苦手というより自分の表現力に対する自信がもてずにいるようであった。保育者として子どもの造形表現活動を適切に支援していくためには、知識や技術はもちろん、何より保育者自身が表現活動を楽しみ、いきいきとした姿で活動を促すことが重要である。

本題材は、さまざまな素材や表現技法を織り込みながらも、無心に集中できる工程を設けることで、一人一人の学生が作品と向き合い、学生の造形表現に対する苦手意識を軽減し、素材に対する理解や表現技法の獲得を促すことができた。また、作品を身につけることで、学生同士が楽しみながら作品を認め合う環境を設定することができた。さらに写真を撮ることで達成感や自信につながり「身につけて楽しむ造形」が学生の自己肯定感や表現力の獲得に有効であることがわかった。

今後の課題は、学生が求める内容に耳を傾けながら、確実に造形力、表現力が伸びていると実感が持てるような題材や授業構成を再考していくことである。限られた授業数の中で、学生がより多くの素材と対話し、学生自身が表現を

楽しみ、保育に必要な造形表現技術を獲得できる題材を、引き続き検討していく必要がある。

引用参考文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』平成30年 p. 234
- 2) 横英子 研究ノート「保育者養成に必要な造形的体験とは何か「造形的な見方・考え方」につながる領域「表現」に関する専門的事項」淑徳大学研究紀要(総合福祉学部・コミュニティ政策学部) 55 159-178, 2021
- 3) 宮里暁美編著、文京区お茶の水女子大学こども園『遊びを広げて学びに変える 思いをつなぐ 保育の環境構成 4・5歳児クラス編』中央法規出版株式会社 2020(初版第4刷発行 2022)
- 4) 深谷ベルタ『造形あそびー“体験”が感性を育む これからの保育シリーズ⑥』株式会社風鳴社 2018(初版第2刷発行 2020)
- 5) 『美育文化ポケット 第26号 2020 Summer』公益社団法人 美育文化協会 2020
- 6) J. ヘンドリック編著、石垣恵美子・玉置哲淳監訳『レジヨ・エミリア 保育実践入門ー保育者はいま、何を求められているかー』北大路書房 2014(初版第6刷発行 2000)
- 7) 厚生労働省『保育所保育指針』〈平成29年告示〉フレーベル館 2017
- 8) 文部科学省『幼稚園教育要領』〈平成29年告示〉フレーベル館 2017
- 9) 内閣府、文部科学省、厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』〈平成29年告示〉フレーベル館 2017